

## マタイによる福音書26章7節 「イエスに香油を注ぐ者」

### 1A 御許に来る者

1B 御言葉を聞くため(霊的祝福)

2B 死を哀しむため(重荷)

3B 香油を注ぐため(捧げ物)

### 2A 「信者」からの誤解と批判

1B 怠惰

2B 死の悲しみ

3B 浪費

### 3A イエスへの良い事

1B 無駄にされない愛の行い

2B 御言葉による信仰

3B 世界への記念

## 本文

マタイによる福音書 26 章を開いてください。私たちはついに、イエス様の十字架への道筋を見ていきます。午後礼拝では前半部分 1 節から 30 節を見て行きますが、今朝は 7 節に注目します。「ある女の人が、非常に高価な香油のに入った小さな壺を持って、みもとにやって来た。そして、食卓に着いておられたイエスの頭に香油を注いだ。」

この出来事は、ヨハネによる福音書 12 章にも書かれていて、香油をイエス様に注いだ人物がマリアだと書かれています。マリアと言っても、彼女はマルタの姉妹であるマリアのことです。マタイは、頭に香油を注いだと言っていますが、ヨハネでは、「12:3 一方マリアは、純粹で非常に高価なナルドの香油を一リトラ取って、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。家は香油の香りでいっぱいになった。」とあり、足に塗ったとあります。頭にも注いで、それからイエス様の御足にも油を塗ったのでしょう。それはそれは高価なもので、後で弟子たちが、「この香油なら三百デナリ以上で売れて、貧しい人たちに施しができるのに。(マルコ 14:5)」と言います。労働者の年収分ありますから、ものすごく高い香油です。結婚の時、初めての夜のために取っておくようなものです。マリアは、それをイエス様に全て注ぎました。今朝は、「イエス様への愛の注ぎだし」を見て行きます。イエス様を愛し、愛しているので、自分自身をイエス様に注ぎだしていくことです。

### 1A 御許に来る者

マリアは、とても興味深い人です。彼女は、福音書の中に出て来る時は、いつもイエスの御許に来るということ、もっと具体的にいうと、イエス様の御足のところに来るということです。私たちには、

そのような習慣がないので分かりにくいと思いますが、これはひれ伏している姿です。足というのは力を表し、征服する姿さえ表します。その足で何かを踏みつけることができます。また足は、卑しい体の器官です。足が汚れて、それを水で洗うのは僕が行うことでした。ですから、マリアがいつもイエス様の御足のところに来るとは、イエス様のところに来て、この方の力と主権の下にへりくだり、また自分自身を卑しくしている姿であります。これが、主に仕え、主の前に礼拝している姿です。「恐れつつ、主に仕えよ。おののきつつ震え、子に口づけせよ。(詩篇 2:11)」

ところで、私たちが心から愛しているものには、私たちは自分のすべてを注ぎたいと願います。自分が心から愛しているもの、最も大事にしているものが、何であるのかは、自分が傾注しているものを見れば自ずと分かります。それがすなわち、自分にとっての神となっています。それが知的なことであれ、楽しみであれ、力であれ、なんであれ、自分の神なのです。けれども、イエスはペテロに、「これらのものより、わたしを愛していますか。(ヨハネ 21:15 参照)」と尋ねられました。イエス様が、自分の心から愛しておられる方、第一の方になっている時に、その心は時間や能力、財産の使い道などに、大きく表れます。

#### 1B 御言葉を聞くため(霊的祝福)

では、具体的に彼女は、何をもちひれ伏していたのでしょうか？初めに、イエス様の御言葉の中にひれ伏していました。ルカによる福音書 10 章 39 節にあります、「彼女にはマリアという姉妹がいたが、主の足もとに座って、主のことばに聞き入っていた。」主イエスを愛して、この方の言われることに耳を一心に傾けていました。そうやって、御言葉にある命、また祝福を自分のものとしていたのです。

イエス様の言葉を最も高くあがめる姿勢は、弟子たちにもありました。多くの弟子たちが、つまずいて立ち去った時に、イエス様が「あなたがたがも離れて行きたいのですか。(ヨハネ 11:67)」と問われました。そして、ペテロが答えました。「主よ、私たちはだれのところに行けるでしょうか。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。(11:68)」永遠のいのちのことばです。御言葉の中に、永遠の命があると信じていました。だから、どんなことがあっても御言葉を聞きにこようとします。どんなに悟ることができなくとも、躓きそうになっても、それでもこの方にこそ、永遠のいのちがあると思っています。マリアは、そういった心で主の御足のところで、この方の言われることを聞いていました。これが、一つ目、彼女が御許に行き、行っていたことです。

#### 2B 死を哀しむため(重荷)

そして次に、マリアは、「自分の心にある辛い思い、重荷を任せるため」にイエス様の御足に近づきました。ラザロが死に至る病にかかって、イエス様に来てもらおうとしていたことを思い出してください。イエス様は、ラザロが病であると聞いてから二日留まってから、それからベタニアに行かれました。その時にはラザロは死んでから既に四日経っていました。マルタが先に行き、イエス様に

話しました。その後でマルタがマリアに、イエス様が来られたことを伝えると、彼女は急いで立ち上がり出て行きました。イエス様がおられる所に来たら、「足もとにひれ伏していった。『主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。(ヨハネ 11:32)』自分の心にある事、その悲しみと困惑をそのまま主に知っていただいたのです。ですから、心にある痛みや重荷を主に知っていただくためにもひれ伏しました。

私たちは、主の前に出て来る時に、お行儀良くしてはいけないことがここで分かります。心にあることを隠したままにするのではなく、自分にあることを全て打ち明けるのです。ダビデは、サウルから逃げている間、祭りを祝うことができませんでした。それでこういっています、「私は自分のうちに思い起こし、私のたましいを注ぎだしています。(詩篇 42:4)」新約聖書においても、それを勧めている箇所がありますね、「ピリ 4:6-7 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。」多くの祈りが、そこまで注ぎだしているものではないので、そこに約束されている神の平安を獲得しないで帰ってしまう場合があります。祈りは、いつまで捧げればよいのか？という問いに対して、「答えが与えられるまで」というものがあります。それは必ずしも、自分の願った通りの答えではなく、主に語られる時までと言ったらよいでしょう。

### 3B 香油を注ぐため(捧げ物)

そして、マリアは、この箇所で見ると捧げ物において、イエス様に愛を示し、頭と御足に香油を注ぎました。自分のものがイエス様のものであるとするならば、そこに惜しみなく、喜んで捧げたいと願うはずです。この方にすべてを明け渡したいと願うはずです。「Ⅱコリ 9:7 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」主に対して捧げ物をする時に、自分の愛は喜んで捧げたいという思いが与えられます。そして喜んで捧げている人を神は愛してくださいます。

自分のものを捧げると言えば、それは量ではないことを聖書は教えています。むしろ、それぞれの能力に応じて献げることが書かれており、けれどもそこには犠牲が伴っています。やもめの献金がそうでした、「ルカ 21:2-4 そして、ある貧しいやもめが、そこにレプタ銅貨を二枚投げ入れるのを見て、こう言われた。「まことに、あなたがたに言います。この貧しいやもめは、だれよりも多くを投げ入れました。あの人たちはみな、あり余る中から献金として投げ入れたのに、この人は乏しい中から、持っていた生きる手立てのすべてを投げ入れたのですから。」本当に小銭だったので、彼女の神への愛は、生きる手立ての全てを投げ入れるという熱烈なものだったのです。こういった愛の注ぎだしこそが、生きた礼拝です。

## 2A 「信者」からの誤解と批判

このように、惜しみなく、心を注いで、マリアは主の御許に来ました。そして興味深いことは、マリアはその度に、同じ信仰者、また信仰を持っていると思われていたけれども、実はそうでなかった人から誤解されたり、批判されたりしていました。真実に、自分自身の愛を主に注ぐ人は、時にそのような誤解を受けても、それでも前に出て来るのです。

### 1B 怠惰

先ほどの、マリアがイエス様の御足のところに来た三つの話を思い出しましょう。初めの、御言葉を聞くために御足のところにいたというのは、どうでしょうか？マリアの姉妹はマルタです。彼女がイエス様を家にお迎えしました。お迎えしたのですから、もてなしをしなければいけません。ところがマリアは、一心にイエス様の御言葉を聞いています。それで、彼女はイエス様をなじります。「主よ。私の姉妹が私だけにもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのですか。私の手伝いをするように、おっしゃってください。」ところがイエス様は、彼女を庇いました。「10:41-42 マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリアはその良いほうを選びました。それが彼女から取り上げられることはありません。」マリアの、一心に御言葉を見つめ、聞き入っているということが、あたかも怠惰であるように見られてしまいました。

どうでしょうか、教会の中ではもちろん、聖書を開いている姿は霊的に見えます。けれども、一般のところで、聖書だけを見つめて、食い入るように読み、ましてや暗証などするものなら、「ああ、この人、変！」と思われるのがおちでしょう。そしてクリスチャンの間でさえ、御言葉に一心に聞くことを煙たがれることもあるかもしれません。しかし、そこから霊的なリバイバルが起こるのです。

ネヘミヤ記においては、小学生ぐらいの年齢の子も含めて、すべて集められて、夜明けから真昼までぶつとうして、エズラが律法を朗読していったのです。民は熱心に聞き、エズラが大いなる神、主をほめたたえ、「民はみな両手を上げながら、『アーメン、アーメン』と答え、ひざまずき、顔を地に伏せて主を礼拝した。(ネヘミヤ 8:6)」そして、他のレビ人たちが、解き明かしを手助けしました。「彼らが神のみおしえの書を読み、その意味を明快に示したので、民は読まれたことを理解した。(8:7)」とあります。そして、すばらしいことが起こります。彼らの顔が悲しみに満ち、泣き始めたのです。自分たちがいかに、神のみこころを損なって来たのかを悟ったからです。けれども、エズラもまたネヘミヤも励ましました。悲しむ者は幸いです、彼らは慰められるとイエス様が言われた通りです。「主を喜ぶことは、あなたがたの力だからだ。(8:11)」と言って、泣いてはならないと言いました。これが、リバイバルです。御言葉を食い入るように聞き、罪が示され、涙し、けれども主が豊かに赦し、恵みんでくださっていることを知って、喜びに溢れます。

## 2B 死の悲しみ

そしてマリアは、ラザロの死のことでイエス様のところに行って泣いた時にも、誤解を受けました。マルタにイエス様が来られたことを聞き、マリアは急いで立ち上がって出て行きました。それを見て、マリアと共にいて彼女を慰めていた人々が、「墓に泣きに行くのだろうと思い、ついて行った。(ヨハネ 11:31)」とあります。イエス様に対して、心を注ぎだす、イエス様の前で泣こうとしていたところ、単にラザロの死を嘆き悲しむものだと思われていたのです。イエス様への強い思いは、そこにいる人々には理解されていませんでした。

イエス様に心を注ぎだすこと、そういった熱心な祈りは、時に批判されることさえあります。ハンナです。彼女はエルカナという人の妻でしたが、エルカナにはもう一人の妻ペニンナがいました。ペニンナは子を多く産みますが、ハンナには子が生まれませんでした。エルカナはハンナを愛していましたが、だからこそ子を産めないというのは重圧がのしかかっていたのです。その言葉にならない呻きを、主を礼拝しに幕屋に行った時、そこで激しく泣いて祈りました。男の子を授けてくださるなら、その子を主に一生お捧げすると誓願を立てたのです。それはでも、言葉になっていたのかどうか分からないほど、唇が動いていただけでした。それで祭司エリが、「いつまで酔っているのか、酔いをさましなさい。」と戒めたのです。ところが、それはもちろん誤解です、ハンナは、「私はここに悩みのある女です。ぶどう酒も、お酒も飲んでいません。私は主の前に、心を注ぎ出していたのです。(1サム 1:15)」と言ったのです。そういうことをやっても、誤解されて、お酒に酔っているだとか、間違えられることがたくさんあります。

しかしハンナの祈りは聞かれます。サムエルが生まれ、彼女は誓願のとおり、その子を祭司エリの保護の下に託しました。また、主はさらに多くの子供をその後に授けてくださいました。心を注ぎだす祈りによって、途中で誤解されましたが、主が共におられることを後で証しすることができたのです。

## 3B 浪費

そして、ここの箇所では、香油をイエス様に注いだことによって、弟子たちから批判を受けました。「この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。(26:9)」つまり、浪費しているのではないか？という批判なのです。これがおそらく、礼拝を捧げる者に対する、尤もらしく見えて、実質的外れな批判であります。神に対する礼拝に、お金と時間をこれだけ取られて、もっと大事なことがあるんじゃないの？貧しい人たちに施しができるのではないの？と。けれども、マリアは知っていました。イエスは主であられ、主であられるなら、神への礼拝と同じようにこの方に捧げなければいけないと思ったのです。

貧しい人に施しをすることは、正しいことです。律法にも、そのようにしなさいと命じられています。けれども、それは主への礼拝を犠牲にしてのものでしょうか？いいえ、違います。主は、貧し

い人に施しをしないと命じておられながら、旧約時代においては、幕屋において金銀を使った用具を造ることを命じられました。家畜を捧げることを命じられました。主への礼拝に、ふんだんに財と能力を捧げるように命じておられるのです。もし、神を神とするこの礼拝行為がなければ、全てのことが無に等しくなります。イエス様がご自身を全て捨てて仕えてくださったのだから、この方に力を尽くして、愛していきたいと願います。その思いが、とてつもなく高価な香油となって表れたのです。自分の好きな人、愛している人に、捧げたいと思うことは、極めて自然なことではないでしょうか？そこで、「貧しい人に施しをしなければ」として、その人に渡すものを貧しい人に分け与えるでしょうか？いいえ、その人に捧げるものは捧げて、それで貧しい人にも施すのですね。

### **3A イエスへの良い事**

このように、イエス様に愛の思いを注ぐことは、周りの人々から批判や誤解を受けるかもしれません。けれどもイエス様が、守ってくださいます。

#### **1B 無駄にされない愛の行い**

まず、イエス様は彼女について、どのように庇われたでしょうか？「26:10 **なぜこの人を困らせるのですか。わたしに良いことをしてくれました。**」良いことを彼女はイエス様にしました。イエス様に対して行なうことは、良いことなのです。イエス様に対する愛の表現、献身、捧げ物は決して無駄にされません。すべてイエス様が、快く受け入れてくださいます。主に対して行なわれたことは、決して、決して無駄にさせません。「神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてはなりません。あなたがたは、これまでに聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。(ヘブル 6:10)」主の御名のために働きや愛は、神は決して忘れてはならないのです。パウロも励ましました。「ですから、愛する兄弟たち。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあって無駄ではないことを知っているのですから。(コリント 15:58)」自分が何か、無駄なことをしてしまったのではないかと、思う時、絶対に、絶対に、その注ぎだされた魂は神が全てを受け取ってくださることを思い出してください。

#### **2B 御言葉による信仰**

そして、イエス様はこうも言って庇われました。「26:11-12 **貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいます。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではありません。この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれたのです。**」マリアは、イエス様がこれから十字架に付けられ、墓に葬られるのを知っていました。そして復活することも知っていたことでしょう。復活の場面で、マリアが他の女たちといっしょに墓に行ったと言う記録はありません。マリアこそが、弟子たち以上に、イエス様の言葉をそのまま受け入れ、そして葬られる前に既にイエス様のことを考えていた例なのです。

こうした行動が、とても霊的です。彼女は、イエス様の言葉に聞き入っていました。霊的というのは、何か自分がふるまうことにはほとんど現れません。どのように現れるかと言いますと、みことばに一心に触れている中で、いつの間にか、主の言われていること、行われていることが何なのかを、自然に発見していることです。マリアのように、周りが何としようと、今、イエス様が言われているのに、間もなく世から去られるのだと感じ取っていたのです。そこで、イエス様はそのことをご指摘されて、庇いました。御言葉に普段から触れているということは、私たちに霊的感覚を与えます。この時が来たということが分かれば、その時を主が悟らせてくださっているからです。パウロは、これと似たことを、「機会を活かす」という言葉を使って説明しました。「エペソ 5:15-16 ですから、自分がどのように歩んでいるか、あなたがたは細かく注意を払いなさい。知恵のない者としてではなく、知恵のある者として、機会を十分に活かさない。悪い時代だからです。」マリアが注意していたから、その機会を十分に活かすことができました。

### 3B 世界への記念

そしてイエス様は、「26:13 まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたことも、この人の記念として語られます。」と言われて庇っておられます。このようにして、弟子たちから叱られるような行いだっただのに、福音書に記録されて、世界中で読まれています。福音が語られるところでは、新約聖書を通して彼女の話も出てくるのです。

このように主への愛の献身をすると、世界に影響を与えます。それはくまなく広がっていきます。テサロニケの教会の噂はアカヤ全体に広がっているとあります(1テサ 1 章)。それは彼らが愛と信仰、またイエス様が来られるという希望に有名だったのです。コロサイ人への手紙でも、彼らの信じている福音は、今や世界中で宣べ伝えられているということ。こうやって主の働きは、広範囲に広がっていくのです。

主への愛、その礼拝がどうして大切なのかを知ることができたかと思います。主への礼拝には、必ず邪魔が入ります。けれども、このようにそれでも主への献身は人々に影響を与えるのです。だから、イエス様を第一にしてください。この方を第一にする時に、他に必要なものは加えて与えられるのです。